

桜蔭俳話会 十二月句会(第三〇一回) 桜蔭会館

平成二十三年十二月十八日

4点②寒風や骨董市の斧と鎌

友子

煮凝や供膳して母命日

幸

①落葉踏む音ゆるやかに老女の背

田鶴子

ぼったりと会ひて破顔の年の暮

真三

3点①一人また一人浜辺の大焚火

守

無灯火を注意の声や月冴ゆる

幸

2点①柿二つ包んで祖母の帰り来る

秀一

銀杏の名刺もとに葉書の朴落葉

貞勝

神撰の天蚕真白秩父祭

貞勝

枯蔦や朝の陽揺らぐ野天の湯

ヤエ子

決別の言葉短かし冬桜

守

大樹光る銀杏落葉のわづかあり

真三

諍ひの一言多き冬満月

幸

今日の無事冬菜抱きて夕陽の畑

田鶴子

銀杏散るまつただ中の幼き子

ヤエ子

レンズの眼冴えて清しき朝の霜

田鶴子

1点①腹立つはささいな事よ布団打つ

友子

①天災と人災の年詰まりけり

守

(不在投句

野上貞勝)

月蝕終へ冬満月に戻りけり

友子

すすき野に蹄の音や美少年

幸

万両の色づく庭の荒れしかな

秀一

門松のスパツと青竹巴投げ

幸

身ほとりの海鳴り霜の墓標かな

守

冬日向語る切つ先折れてをり

秀一

風呂吹や結婚記念日忘れぬし

友子

拾い読む家庭医学書金柑の実

幸

オリオンと並び月蝕始まりぬ

友子

気にとめし素振りはみせず浮寝鳥

秀一

年の暮老いに寒波ぞ増税論

田鶴子

忘年会旧友と語るは物忘れ

田鶴子

※一茶忌や夜空の星は輝やける

真三

芙蓉枯る風の出できし昼の月

秀一

鴉鳴くや朝の目覚めのいさぎよし

ヤエ子

干し柿の黒くなるまで干されおり

ヤエ子

ぼろ市やダブルの夢の舞踏靴

貞勝

仲冬のバーベラのジャズ大拍手

真三

茜色漂う運河や冬日沁む

ヤエ子

草紅葉水琴窟のひとりごと

貞勝

仰ぎ見る連らなる木々や山眠る

真三

冬ざるや地のこぼれる崖の胸

貞勝

開戦日戻って来ないブーメラン

守